

<論文>

『パンドスト』と『冬物語』

菊 川 倫 子

要旨

シェイクスピアの『冬物語』はロバート・グリーンの『パンドスト』を種本として書かれている。『パンドスト』がどのように『冬物語』取り入れられているかを探る。

キーワード

パンドスト、冬物語、作劇術

『冬物語』はボヘミアの廷臣アーキデイマスとシチリア王レオンティーズの重臣カミローの何気ない会話で始まる。

アーキデイマス：カミロー、いずれあなたがいまの私と同じ役目でボヘミアにおいてになれば、いま申し上げたように、私どものボヘミアとあなた方のシチリアがどんなに違っているか、お分かりになるでしょう。

カミロー：多分この夏、シチリア王もボヘミアを訪問なさるおつもりです、この度のご返礼として当然ですが。

アーキデイマス：そうであっても、恥ずかしいほどのおもてなししか出来ないが、心を込めることでお許しいただくとして。なにしろ—

カミロー：何をおっしゃる—

アーキデイマス：いや、そうだと思うから包み隠さず申し上げるのです。私どもにはこれほど豪勢なことはとてもできない—こんな世にもまれな—何と言ったらいいか—ボヘミアでは眠りを誘う酒でも召し上がっていただこう。そうすれば五感が鈍り我々の不行き届きにもお気づきにならず、お褒めいた

だけないかわりにおとがめもないでしょう。

(1 幕 1 場、1 ～ 15 行目)¹

シチリアを訪問したボヘミア王ポリクシニーズは既に 9 ヶ月滞在している。その間のもてなしの豪華さと歓待ぶりについてアーキデイマスは感謝しているのである。なぜ 9 ヶ月もの長い期間、一国の王が自国を留守にして他国に滞在しているのかは、続く会話で理解される。

カミロー：シチリア王はボヘミア王にいくら好意をお示しなっても十分とは言えない。ご幼少のころは共に養育をお受けになり、そのとき根づいた友情はいまやひとりで大きく枝分かれして青々と繁っている。成人なさってからは、お二人とも国王としてのお立場とご公務のために引き離され、親しくお会いになることも叶わなかったが、お互いに立派な使者をお立てになり、贈り物や手紙など、心を込めて交わしてこられた。要するに離れ離れでも一緒にいらっしゃるようなもの、時空を超えて握手をなさり、いわば東西南北から吹く風が一箇所でお会いするように抱き合っておいでなのだ。お二人の友情がいつまでも続きますよう！

(1 幕 1 場、20 ～ 30 行目)

少年期から親しい友人だった二人の王が長い年月を経て再会し、もてなす王はその歓待ぶりで惜しみない親愛の情を示している、というのがこの場面に対するおおかたの解釈である。すると、多少なりともそのような解釈をする批評に接した読者、あるいはストーリー展開に集中して細部を意識しない読者は、レオンティーズとポリクシニーズの間の友情の確かさを前提としてその後の作品世界に入ってゆくことになる。

しかし、これらの行が伝達するものはそれだけだろうか。アーキデイマスが言うシチリアとボヘミアの違いは、対話の表面上は気候風土や文化の違いだと

考えられるが、「違い」という語は、両国の王が親しいにもかかわらず、王たちの分裂を印象付けはしないか。² アーキデイマスのへりくだった物言いとカミローのやや尊大さを含んだ返答は二人の身分差を示すためのもののだとしても、9ヶ月もの間、同じ宮廷で過ごしながらどこかよそよそしくはないか。そして、二人の王の友情についてのカミローの誇張された言い方には、なぜ誇張が必要だったのか。『冬物語』と種本を比較することで、シェイクスピアの作劇法に迫り、作品が伝え得る可能性を探りたい。

シェイクスピアの多くの作品にはストーリーの元となる種本がある。『冬物語』の元になっているのはロバート・グリーン『パンドスト』³である。1588年に初版が出版されたこの作品は散文物語で、『冬物語』が書かれるまでに5版が出されていた。『冬物語』は『パンドスト』の話に沿って物語が展開されていて、作者が『パンドスト』をどのように構成しなおしたかを見ると作劇の意図が見える可能性がある。それを『冬物語』のいくつかの場面をとおして見てみたい。

『冬物語』的一幕がそれに相当する『パンドスト』の冒頭部分と最も異なっている点は、グリーン『パンドスト』の主人公パンドストの行為の説明と、彼が行動することで引き起こされる状況についての詳細な説明がないことである。説明の省略は二作品の大きな差異となっている。詳細な説明で描写された内容を端的な劇形式の中に盛り込むことで、何が起こるのであろうか。

『パンドスト』の冒頭は、人間の理性を奪う激しい情念のうちでも、際限のない悪意で本人も他者も苦しめ抜くのが嫉妬であると述べる。嫉妬に取り憑かれた者は他者への疑念と不信から逃れられないので、たとえば嫉妬から自由になろうとして友人に助言を求めても、その助言自体がこちらに対して謀られた罪科を隠すための都合の良い策略ではないかと疑ってしまうのだ、と説明する。『パンドスト』の1588年の出版から『冬物語』上演までの期間は、『パンドスト』の複数回の重版に加えて、やはり強烈な嫉妬を扱った『オセロウ』の上演が

1604年、サイモン・フォアマンがロンドンで『冬物語』を観たのが1611年であるので、「嫉妬」は当時の人々が共通して抱いていた興味であった可能性がある。グリーンはパンドストの嫉妬がどのような状況で生じて、彼がそれに対してどのように考え行動し、その結果、周囲にどのようなことが起こってしまったかを非常に詳細に歴史的時間にそって描写する手法を取っている。『パンドスト』はいわば、嫉妬という狂気を抱えた一人の王の物語を叙事的な手法で書いた作品なのである。嫉妬に取り憑かれた男がその結果として周囲をどのような状況に巻き込んでしまうのかを詳細に語ったことで、グリーンは『パンドスト』に教訓的意味合いを持たせているように見える。

パンドストの描写は次のように始まる。

In the country of Bohemia there reigned a king called Pandosto, whose fortunate success in wars against his foes, and bountiful courtesy towards his friends in peace, made him to be greatly feared and loved of all men. This Pandosto had to wife a lady called Bellaria, by birth royal, learned by education, fair by nature, by virtues famous, so that it was hard to judge whether her beauty, fortune, or virtue won the greatest commendations. These two, linked together in perfect love, led their lives with such fortunate content that their subjects greatly rejoiced to see their quiet disposition.

(Appendix B, p. 235)

パンドストという名の王がボヘミアを治めていて、戦争での敵に対する見事な勝利と平和時に味方に対して与える物惜しみしない親切で、大いに恐れられ、また誰からも愛されていた。このパンドストにはベラリアという妻があったが、その生まれは王侯で、教育を受けた博識の持ち主、性質がうるわしく、また徳の高さでも名高かったので、彼女の美しさと幸運と徳のどれが

最も素晴らしいのかを判断するのは難しいほどだった。この二人は欠けるところのない愛情で結ばれていて、とても満足して過ごしていたので、臣下たちも王夫妻の穏やかな気質を見ておおいに喜んでいた。

(「付録」B, 235ページ)

ここに描かれているのは素晴らしい人生を歩んでいる理想的なカップルである。敵に強く味方に礼儀を尽くし、非の打ちどころない妻を持つ王であるパンドスト。しかしこれは、人間の実態を備えた登場人物というよりは、典型的な理想美を語る「昔語り」の世界の人物たちである。臣下が王の存在に満足していることは国家の安定的運行を暗示していて、その人物像はボディ・ポリティックのトップとしての理想像と重なる。グリーンのパンドストは強権を振るうこともなく、王侯らしい寛容に特徴付けられた人物としての描写が続く。「国家」という一つの身体を健全に導いてゆく家父長的存在としての王がパンドストであり、いまボヘミア⁴は理想的な政体として安定しているのである。次の一節には王らしい寛容を示すパンドストの様子が語られている。

Pandosto, whose mind was fraught with princely liberality, entertained the kings, princes, and noblemen with such submiss courtesy and magnificent bounty that they all saw how willing he was to gratify their good wills, making a general feast for his subjects, which continued by the space of twenty days; all which time the jousts and tourneys were kept, to the great content both of the lords and ladies there present.

(Appendix, p.235)

パンドストは王らしい寛容の心を持っていて、諸国の王や王侯たち、貴族たちに対しても腰を低くして礼儀を尽くし、堂々たる気前の良さで接したので、それを受けた人々は皆、彼らがパンドストに向けた好意に対して、どれ

ほど彼が答えたいと思っているかがわかるのだった。彼に従う者たちのために大宴会が二十日に渡って催され⁵、その間ずっと、馬上槍試合が行われるのだが、それが諸侯にも貴婦人方にもおおいに喜ばれるのだった。

（「付録」B、235ページ）

王の理想像を具体化したものとしてのバンドストがここには描かれている。しかし、この立派な王としての姿は、生身の人間の、生きた実態を伴うものというよりは、生き生きとした個としての特徴のない「あるべき姿の王」である。これは、次の「嫉妬」の場面での狂った王への変化を際立たせる予備知識として必要な設定なのである。シェイクスピアはこの説明的な設定部分を省いた。

さらに、『バンドスト』ではポリクシニーズに相当するイージスタスが訪ねてくると、バンドストがベラリアと大勢の臣下を伴って自ら馬で出迎えに行き歓迎する場面が描かれている。「腰を低くして礼儀をつくし、堂々たる気前の良さで」人に接するバンドスト像を反映したものといえる。イージスタスとバンドストは子供時代に一緒に育った。イージスタスの来訪は時の流れも地理的な距離もその頃の二人の友情を消すことはできないと示したかったからだ。バンドストはそれに応えて、この古い友人をもてなして知己を得るようにと、妻のベラリアに求める。そしてベラリアは、夫が愛情を持っている相手になら彼女も好意を感じるのだということを示すべく、イージスタスを十分にもてなすことになる。シェイクスピアはこの部分も省いたが、省略された部分にある出迎えの豪勢さの具体的描写と二人の友情のいきさつは、先に挙げた1幕1場1～30行目の言葉の中に簡潔に短縮されて、『冬物語』に盛り込まれた。そして『冬物語』ではこのアーキデイマスとカミローの短い会話に続いて、ボヘミア王ポリクシニーズがシチリア王レオンティーズに帰国の意思を告げるのである。シェイクスピアはポリクシニーズのシチリアへの到着やその後の長い滞在についてはいっさい書かず、いきなり二人の王の別れから描き始めた。つまり、分裂の要素から作品を開始することにしたのである。カミローが二人の友情の永

続を願う誇張法にどこか皮肉で投げやりな響きを読者が聞き取るとしたら、それは、この言葉が分裂の危機がある場面に置かれることで、単なる廷臣の忠義心を示すものではなく、逆説的にその願望が叶わないことを匂わせる効果を發揮して、ある種の絶望感を作品に漂わせるからである。

説明の省略によって主人公に強い焦点を当てる作用を持つもう一つの箇所が、嫉妬の場面である。

グリーン作品では、パンドストが嫉妬を抱くようになった原因がはっきりと書かれている。夫の要求に応えようとベラリアがイージスタスの寝室に入り、もてなしに漏れがないか確認をするのである。夫に従順で、夫が愛するものを自分も愛そうとするベラリアは、夫への愛情の深い女性であるようだ。しかし、男性の寝室に入るという「行き過ぎ」を軽率にしてしまう点は「教育を受けて博識である」はずの彼女の特徴とはそぐわない。彼女のこの行動はあまりに無防備で、独立して社会性を持つ一個人として成立するにはあまりに稚拙だと感じさせるのである。そもそもグリーンはパンドストの没落に焦点を当てていて、彼の妻である女性を描くことに関心が薄かったのではないか。彼はベラリアという人物を一貫した実態のある人物として緻密に描こうとはしていなかったように見える。王妃としてパンドストと対等の大きさを持たない夫依存型の女性であるベラリアは、理想的な王であったパンドストが、なぜ破壊的な嫉妬にとりつかれて転落することになるのかを説明するために必要な人物として扱われている。その点が『冬物語』のハーマイオニとの違いである。その後も、執務に多忙なパンドストに代わってイージスタスの相手をするうちに、ベラリアと彼女の夫の友人は、お互いを認め合うようになり、そのことがパンドストの二人に対する疑念と嫉妬を急激に増大させることになる。

ポリクシニーズが帰国しようとしている時点から作品が始まること、カミローが誇張法で王たちの友情の永続を願望すること、これらは二人の王の分裂を暗示する仕組みとなっていることを見てきた。自分ではポリクシニーズを引き止めることができなかったレオンティーズは、妻のハーマイオニにその役目

を試してみるよう命じる。夫の要求に嬉々として応じるハーマイオニは夫を喜ばせたいベラリアと共通するが、シェイクスピアはハーマイオニを非常に利発な女性として肉付けしている。彼女はベラリアのように夫の嫉妬に根拠を与えるような行動はとっていない。ただ、才気煥発に自らの利発さでポリクシニーズの引き留めに成功するのである。彼女はシェイクスピアが描いた他の才気のある女性たち、例えばポーシャやロザリンドらと同様に、自らの力を発揮できる女性として描かれている。そして、ハーマイオニの勝利とでもいうべきこの場面は、その利発さゆえに彼女とレオンティーズの亀裂を決定的にしてしまう理不尽さと、嫉妬に苦しむレオンティーズの心理に読者や観客の焦点があたり、この作品をレオンティーズの心の過程を描いたものとして方向づけする点で、意味を持っている。

ポリクシニーズが滞在延長を求めるレオンティーズに応じなかったのは、9ヶ月も留守にしている自国が心配だからという理由による。彼はレオンティーズの息子マミリアスが将来を嘱望される王子であることを知っている。同じように自国に息子を残してきているポリクシニーズが、王として父として帰国を望むのは当然のことである。国家を健全に導くべきトップであり、国の後継者を健全に育てる義務を負う地位にある王同士として、彼はレオンティーズの要求を受け入れられないのである。であるから、友人をひきとめたい気持ちがあるにしても、レオンティーズはポリクシニーズの帰国の理由を理解するべきであるし、そもそもポリクシニーズに滞在延長を望むこと自体が、レオンティーズが王としてバランスを欠きつつある兆しであるともとれる。ポリクシニーズはしかし、レオンティーズの勧誘を拒絶しながら、ハーマイオニから求められると即座に要求を受け入れる。その結果、ポリクシニーズとハーマイオニの間のセクシュアルな関係をレオンティーズは疑うのである。

レオンティーズの抱く疑惑に作者は説明を与えていない。バンドストが嫉妬に陥っていく過程が逐一、理由づけられ説明されたのと異なり、こちらの作品では嫉妬の経緯に外部からの解説をしていないのである。嫉妬の進行はすべて

舞台上のハーマイオニとポリクシニーズとは離れた位置、あるいは二人には聞こえない場としてみなされる位置でレオンティーズ自身が自分に対して述べる独言で、読者あるいは観客に伝えられる。これらは登場人物が読者や観客へ偽りのない内面を吐露する独白となっている。グリーンがパンドストの嫉妬を作者としていわば外から説明したのとは対照的に、レオンティーズが嫉妬に苦しむ心理は、こうして、彼の内面から外へ向けて拡大される。その結果、読者も観客もレオンティーズの苦しみへと直接視線を向けることになる。嫉妬が引き起こす成り行きを叙事的に語る元の話から離れ、『冬物語』は、レオンティーズの独言をとおして彼の苦悩する心理を抒情する話になっている。理性を欠いたひとりよがりな嫉妬を展開するレオンティーズを、心理的虚弱者と見ることも可能だろう。⁶ しかしシェイクスピアは、レオンティーズの独白によって、人間が簡単に陥る普遍的な情緒である「嫉妬」をレオンティーズという個人の体験をとおして明確に分析してみせたとも考えられるのではないだろうか。レオンティーズの独白はグリーンが詳細な説明的散文で表わそうとした「嫉妬」のプロセスを生身の人間性へと変貌させる技巧であると言える。

レオンティーズの嫉妬が周囲へと影響を拡大していく過程は、彼の「喪失」の過程として描かれる。レオンティーズもパンドストも妻の姦淫を確信しているが、その裏付けとしてデルフォイに神託を求める。もちろん神託は妻の無実を告げる。『パンドスト』では神託が公表されるのに先立ってベラリアが見事な発言をする。

もし神々が人間の行為を密かに知っているなら—知っているのは間違いありませんが—私は今まで耐えてきた忍耐で、運命の女神に恥をかかせたいと思います。そして汚れない私の人生が、悪意を持って私に不信を持つ人の汚点になれば良いと思います。偽りの評価が私の名誉を誤って伝え、疑いが私の信用に泥を塗ろうとしたのです。でも、貞節が砦となれば、評価も疑念も襲いはしても掠奪はできません。イージスタスが来る以前に私がどのよう

な生活をしていたかを、バンドスト、神々とあなたに訴えたいと思います。イージスタスと私の間に何があったかは、神々だけがご存知です。それがすぐに明らかになることを願います。私がイージスタスを愛したことは否定できません。私が彼を尊敬したことを、私は堂々と告白します。彼の徳の高さに惹かれ、彼の尊厳に惹かれたからです。でも、情欲については、イージスタスは無実だと申し上げます。そして私も汚点がないと、神託でわかることを願います。

(「付録」B, 247ページ)

ベラリアはこの発言で確固たる信念を述べるができる女性として登場してくる。しかし、一個人としての主張を持ったベラリアは、この直後に死んでしまい、バンドストに対応する存在となることはない。無実の信託が発表され喜んだのも束の間、息子のガリントアの突然の死が伝えられ、ベラリアは衝撃を受けて死んでしまうのである。

ベラリアの死はハーマイオニの失神として『冬物語』に取り入れられている。物語をハーマイオニが死なない展開にしたことが『冬物語』の結末に未来への希望を残すことになったのは、周知のことである。すなわち、死んだとされたハーマイオニは、実はポーライナに匿われて生き伸びていて、16年の後に、失われたと思われていた娘のパーディタと再会する。パーディタはポリクシニーズの息子フロリゼルと純粋な愛情で結ばれていて、全ての誤解が溶け、和解がもたらされて、シチリアの人々もボヘミアの人々も若い恋人たちに未来を見る、というシェイクスピア後期のロマンス劇に特徴的な結末である。

しかし、ハーマイオニとレオンティーズの关系到本当に和解はあるのか、ハーマイオニに降りかかった経験は、あまりに過酷ではなかったか、16年という時間を含めて、失われたものがあまりに大きいのではないか、多くの読者が疑問を抱くのも否定できない。⁷ それはなぜであろうか。

ベラリアのバンドストに向けての抗弁を、シェイクスピアは裁判の場面のハーマイオニに投影した。

ハーマイオニ：いま私が罪という汚名を着せられていることは認めます、けれどそれ以外は何ひとつ認めるわけには参りません、いまお咎めを受けているポリクシニーズ様とのことですが、包み隠さず申し上げれば私はあの方を愛しました、けれどそれは一国の王がお受けになって当然の敬愛であり、一国の王妃である私が与えて恥じない愛でした。あなたご自身がお命じになったままの愛であり、それ以外の何ものでもありません。もしお言いつけどおりにしなかったなら、あなたに対しては不従順、あなたのお友達に対しては忘恩の罪を犯すことになったでしょう。あの方の友情は口がきけるようになりになったご幼少のころからあなたのものだったと率直に語っておいでしたから。陰謀については、私はそれがどんな味なのかも知りません。味見せよと突きつけられても途方に暮れるばかりです。私が知っているのは、カミローは正直者だということだけです。なぜ宮廷を去ったかは、神々でさえ、お分かりにならないでしょう、私以上にご存じならともかく。

レオンティーズ：お前はあの男が出ていくのを知っていた、そのあとお前がやるはずだったことも知っている。

ハーマイオニ：陛下、私にはあなたの言葉がわかりません。

(3幕2場、58～78行目)

ハーマイオニの抗弁は理路整然としていて、虚弱なところがない。これは一国の王妃が夫である王から王殺しの疑いをかけられて、公式の裁判で裁かれようとしている場面である。話しているのは夫婦だが、話し方は私的ではない。作品冒頭のハーマイオニは一つの家庭の妻として夫に甘える存在であったが、ここでは「王である夫」と対抗する「妃」という政治上の位置に置かれている。「私にはあなたの言葉がわかりません。」という一文は、二人の間の決定的な断絶を示すものである。レオンティーズとのコミュニケーションを一個人としてはとれなくなったハーマイオニが頼るのは、強い政治的立場にあった父であるが、その父はすでに死者であり、彼女に政治的な力を与えることはない。

ロシアの皇帝がわたしの父だった。

ああ、父が生きていてくれて、娘のこの裁判を見てくれたら！

（3幕2場、117～118行目）

絶大な権力をふるう夫王に対し、ただの一人の無力な女性として彼女は舞台から姿を消すことになる。ハーマイオニが舞台上から姿を消したのち、傷心のレオンティーズを改心へと導く役割を担うのがポーライナである。彼女とその夫であるアンティゴナスは嫉妬という狂気に取り憑かれたレオンティーズに対して、諫言をする。特にポーライナがレオンティーズに向けて発する諫めは手厳しい。

アントニー・ガッシュはポーライナとアンティゴナスの夫妻について興味深い考察をしている。⁸ ボディ・ポリティックのトップである王が異常をきたしたとき、臣下はどうするかということについての一節である。

この点でこの挿話は、ケヴィン・シャープがジェームズ一世時代の政治的言説に広く見られると指摘した思考パターンと一致する。シャープは書いている—「人間の自然な肉体においては、健康はさまざまな体液の調和すなわちバランスの取れた^{ナチュラル・ボディ}体^{コンステイテーション}質（この語は今では政治的な意味〔「政体」〕を持つ）を維持することであった」。この調和の観念によって、とシャープはつづけて言う—政治的動乱を「（われわれがふつつく見るように）権力闘争としてではなく、むしろ^{ボディ・ポリティック}〈国家身体〉内部におけるバランスの一時的喪失として」見る理由がよくわかるようになる、と。ポーライナが忠義と臣従を明言し、しかし同時に国家の医者であるべき王が病んでいるから、王を癒すことが助言者の義務だと言うとき、彼女はまさにこの世界観にもとづいて行動しているのである。……と言うわけで、王に対するポーライナの外見上の反逆は、逆説的に臣従の態度であることになる。というのもこの王は、カミローの言葉を使えば「ご自身に反逆し」（1幕2場355行）激情の奴隷になってい

るからである。…… ポーライナにとって真の従順とは（彼女の名前と繋がりのある聖パウロにとってと同様に）奴隸的服従とは正反対のものであることは、重要な意味をもつ。さらに、アンティゴナスとポーライナは助言者夫婦として象徴的である。…… 結婚という絆で結ばれたこの二人の連帯は、印象的である。

レオンティーズの過ちを諫める役割をになうのがポーライナとアンティゴナスであり、一人閉じこもったレオンティーズを改悛へと導いて16年を過ごさせるのがポーライナである。ハーマイオニが姿を消した後は、ポーライナがシチリアを最終場面での和解へと導いている。つまり舞台上には上がらないものの、シチリアの16年は、王の嫉妬という狂気で政体として病んでしまった状態から回復するための期間ということになる。ハーマイオニが失われていた娘のパーディタを取り戻し、パーディタは渴望していた母に出会えたこと。パーディタとフロリゼルが皆に祝福され望まれて結婚することになったこと。これらは、失くしたものの真の回復であり、未来の希望である。レオンティーズとハーマイオニはどうであろうか。再会したレオンティーズに対してどこか控えめなハーマイオニ。そしてハーマイオニの顔にシワを見つけるレオンティーズ。シワは過ぎた16年という時の結果であり、16年の過去を示すものでもある。レオンティーズとハーマイオニの和解からは、新しい未来というよりは16年間の過去が感じられるのである。『パンドスト』では主人公が突如それまでの行為を悔いて抑鬱状態になり自殺する。彼の世界は彼の死によって閉ざされ、彼の死後、嫉妬の被害者たちが幸せな新たな世界を開始する。道徳的な因果応報に従った展開の中で、パンドストの死は彼の過去の否定となる。種本とは全く異なる結末を持つ『冬物語』は、そのような閉ざされた終わり方をしない。ハーマイオニのシワは、作品の人物たちが過去をたずさえて生きてゆくことを示しており、そこに過去を否定しないロマンスの奥行きがあるのである。

注

- 1 作品の翻訳は全て次のものから引用した。
松岡和子訳『冬物語』シェイクスピア全集18、(ちくま文庫、筑摩書房、2017年)
- 2 原文は great difference betwixt our Bohemia and your Sicilia。この部分にレオンティーズがポリクシニーズの命を狙うようになる今後の展開を読み取る批評家もいる。
John Pitcher (ed.) *The Arden Shakespeare The Winter's Tale*, p. 145, note, (New York, Bloomsbury Publishing, 2010) などがその例。
- 3 Robert Greene, *Pandosto*, in *The Oxford Shakespeare The Winter's Tale*, Appendix B, pp.234～274, Stephen Orgel ed., (Oxford and New York, Oxford University Press, 1996) *The Winter's Tale* の使用テキストはすべてこの版による。
- 4 『パンドスト』では、彼がボヘミア王、イージスタスがシチリア王である。シェイクスピアはそれを逆に設定した。
- 5 宴会が開かれる二十日という数字も実際にそうであることを示しているのではなく、昔語りで「多数」を示す数値にすぎない。
- 6 フェミニズム批評から考えるとレオンティーズは社会的にも心理的にも未熟である。朱雀成子、「ハーマイオニの変貌」、『愛と性の政治学 シェイクスピアをジェンダーで読む』、(九州大学出版会、2006年) など。
- 7 スタンリー・カヴェル、「損得を考え直す」、『悲劇の構造』(春秋社、2016年) など
- 8 アントニー・ガッシュ、「シェイクスピアにおけるカーニヴァルと聖なるもの」、『シェイクスピアとカーニヴァル バフチン以後』、ロナルド・ノウルズ編、266～267ページ、(法政大学出版局、2003年)

(きくかわ りんこ 本学教授)